

語りえぬものを語る言葉

—メルロ＝ポンティと超越論的言語の問題—

佐野 泰之 (京都大学)

The speech that speaks the unspeakable

— *Merleau-Ponty and the problem of transcendental language*

Yasuyuki Sano

The paper suggests a new approach to the problem of *engagement* by prompting phenomenologists to consider Merleau-Ponty's philosophy of language. As a basis for our discussion, we first examine Husserl's definition of “phenomenological reduction” in his later works and explore Merleau-Ponty's understanding of this issue through his thesis, as follows: “The most important lesson of the reduction is the impossibility of a complete reduction.” Second, we elucidate Merleau-Ponty's assertion by highlighting his fundamental idea in which there is no thought without language. This means that returning from “the world instituted by language” to the origin of our experience (i.e., the “primordial silence”) requires executing a “gesture which breaks this silence.” Finally, we assess the impact of these ideas. We conclude that a serious acceptance of Merleau-Ponty's discussion on language requires radical changes to phenomenological methods. We sketch these changes by referring to a problem that was pioneered by Eugen Fink (i.e., “transcendental language” in *Sixth Cartesian Meditation*), and we claim that phenomenology is not a form of meditation, but an action entailing a responsibility to others.

keywords: Maurice Merleau-Ponty, Edmund Husserl, Eugen Fink, Stendhal, Language

キーワード: メルロ＝ポンティ、フッサール、フィンク、スタンダール、言語

1. 完全な還元の可能性

1. 1. 後期フッサールにおける現象学的還元

近代科学は、「主観的」で「相対的」なわれわれの直接経験の世界を、万人に妥当する量的諸特性によって規定される「客観的世界」として把握する手段を発明した。この客観的世界は、われわれの直接経験の世界を基盤としてその上に抽象的に構築された「理念の衣」にすぎなかったが、われわれは歴史の中で次第にそのことを忘れ、客観的世界こそが「真の存在」であると思いつむようになった。それゆえ、われわれは近代科学に由来するさまざまな先入見に対して「判断中止」を施し、科学的真理のいわば故郷であるわれわれの直接経験の世界、「生活世界 (Lebenswelt)」を取り戻さなければならない——フッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下『危機』)の中でこのように論じた。

しかし、この生活世界は、われわれの経験において「地平」という様態で「あらかじめ与えられている」ものであり、生活世界を主題的に認識するためにはさらなる「判断中止」が必要になる。この判断中止によって、われわれは生活世界を構成している超越論的主観性の能作へとさらに遡行し、それによって自然的態度においては自明のものとして無根拠に受け入れられていた生活世界を「超越論的に理解可能にする」(*Hua. VI*, 193/345)。

フッサールの考えでは、生活世界から超越論的主観性へと遡行するこの第二の判断中止によって、現象学者は「比類のない哲学的孤独」(*Hua. VI*, 187f./335)に直面する。判断中止によって世界とそこに存在するすべての存在者——他人も含めたすべての存在者——は私にとっての「現象」へと変貌する。超越論的主観性としての私は、私の前に現象する一切を対象として経験しながら、自分自身は決して対象化されえない「格変化不可能な」主観性である(*Hua. VI*, 188/337)。それは世界の中に存在する人間としての私とは異なる、他人との比較を絶した非人間的な私なのだ。

1. 2. メルロ＝ポンティにおける現象学的還元

フッサールが要請している第二の還元、すなわち、生活世界から超越論的主観性へと還帰する「超越論的判断中止」は、いわば、われわれが「地平」としてそれ自体としては明確に自覚されることのない自明性のもとで経験しているものを、主題的な「対象」としてどこまで意識化することができるのかという問いに、関わっている。フッサールは、一方では、「到達されたいかなる「根底」も実際にはさらなる根底へと赴くよう指示し、開かれたいかなる地平も新たな地平を呼び起こす」(*Hua. VI*, 173/309)と述べ、この意識化の作業の際限のなさを強調するが、他方では、この無限とも言える作業を一步一步進めていった先に、一切の地平を明るみに出し、一切の自明性を理解可能にする完全な還元という目標を、少なくとも原理的な可能性としては見据えているように思われる。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中で、この第二の還元という発想を批判する。彼の考えでは、「[...] 可能なのは次の二つの事柄のいずれかであることは明らかである。構成によって世界が透明になるか、それとも構成が生きられた世界のうちの何ものかを保持し続けるか。前者の場合には、なぜ反省が生活世界を経由する必要があるのかを理解で

きなくなるし、後者の場合には、構成は生活世界から決してその不透明さを剥ぎ取ったりはしないことになる。フッサールの思考が論理主義的時期の多くの記憶を介して次第に進んでいったのは、この第二の方向である」(PbP, 423n./2.237n.)。

現象学的還元が、われわれの経験から一切の地平ないし自明性を追放して「透明」になることはありえない。このような考えから、メルロ＝ポンティは「還元の最も偉大な教訓は完全な還元が不可能だということである」(PbP, 14/1.13) という『知覚の現象学』序文の有名な主張を行なう。メルロ＝ポンティにとって、「還元についての最上の定式」は、世界を前にした「驚き」というフインクの表現である (PbP, 14/1.12)。メルロ＝ポンティがこの定式を好むのは、おそらく、それが還元に対象化ないし主題化という含みを必ずしももたせないからであろう。還元がもたらすのは「驚き」である。言い換えれば、内在の明証のうちに休らう純粹意識ではなく、不安定、動揺、不調和にかき乱された実存である。「驚き」という還元の定式は、このようにして、還元の実存論的解釈とでも呼ぶべき解釈の道を拓く。

1. 3. 方法論的問題

完全な還元の不可能性というテーゼは、メルロ＝ポンティの読者であれば誰もが知っている基本的テーゼの一つである。しかしわれわれは、このテーゼの含意を最後まで徹底的に考え抜いたことがかつてあっただろうか。ブライアン・スミスは、メルロ＝ポンティにおける現象学とマルクス主義の結合を論じた啓発的な研究の中で、この問いに否と答える。「不完全な還元という着想は、超越論的現象学に対するメルロ＝ポンティの再解釈の積極的な美点であると広くみなされており、賞賛すらされている [...]。しかし、それが正確に何を意味しているのか、結局のところどうということなのかは十分に検討されていない」(Smyth 2014: xii)。私見では、完全な還元の不可能性というテーゼは、それが徹底的に展開されるならば、現象学の方法あるいは存在意義に対するわれわれの理解を根本から刷新するものである。この見通しを言語についてのメルロ＝ポンティの見解と、フインクが提起した「超越論的言語」という概念を手がかりに確証すること、それが本稿の目的である。

2. 沈黙と表現

2. 1. 言語と思考

完全な還元の不可能性というテーゼは、言語と思考の関係についての根本的洞察によって支えられている。その洞察が提示されるのは、『知覚の現象学』第一部第六章「表現としての身体と言葉」においてである。メルロ＝ポンティはそこで、言語というものを「自分とは別の現象を告知する現象」という意味での「記号 (signe)」とみなす常識的見解を批判する (PbP, 221/1.298)。世界の中にある実在的対象であれ、話し手や聞き手の心の中にある観念であれ、叡智界のような場所にあると想定される理念的対象であれ、言語を言語そのものの外部に、言語そのものとは独立に存在する実体を単に指し示したり写し取ったりす

るものと考えてはならない。むしろ、これらの対象そのものが言語によって表現されることではじめて構成されるのであり、したがって言語抜きでは存在しえない。

にもかかわらず、われわれは大抵の場合、言語がそのような役割を果たしていることを自覚せず、言語が表現している対象が、言語を離れてそれ自体として存在していると思ひ込んでしまう。メルロ＝ポンティの考えでは、これは理由のないことではない。なぜなら、対象は言語によって一旦表現され構成されてしまうと、あたかも表現される以前からずっとそれ自体として存在し続けていたかのような永遠性の様相を帯びるからである。これは、メルロ＝ポンティが「回顧的錯覚 (illusion rétrospective)」(e. g. *PbP*, 76/1.100) と呼んでいる現象である。この現象によって、われわれは対象を存在させるために言語が果たしている不可欠の寄与を忘れてしまい、言語は「表現されたものの前で姿を消す」(*PbP*, 462/2.292) ことになる。

ここから、言語と思考の関係についてのメルロ＝ポンティの一般的主張が導かれる。「思考は何ら「内面的」なものではなく、世界の外や語の外に存在するわけではない。この点でわれわれに思い違いをさせ、表現以前にそれ自体として存在する思考があると信じ込ませているのは、われわれが沈黙したまま想起することができるような、すでに構成され表現された思考なのである。それらの思考によって、われわれは内面的生活なるものがあるという錯覚を抱くのだ。しかし、実際にはこの沈黙と称されているものも言葉でざわめいているのであり、この内面的生活なるものも一つの内面的言語なのだ」(*PbP*, 223/1.300)¹。

2. 2. 原初的沈黙

言語と思考の関係についてのこのような洞察ゆえに、メルロ＝ポンティの現象学は、一方では言語への抵抗という様相を帯びてくる。メルロ＝ポンティの考えでは、われわれがさしあたりその中で暮らしている世界とは「言葉によって制度化された世界」である。われわれはそこから、もはやわれわれを「驚かせる」ことのない「言語的」な世界を離れて「原初的沈黙」の領域へと遡行しなければならない (cf. *PbP*, 224/1.302)。メルロ＝ポンティはここで還元や生活世界や超越論的主観性といった概念には一言も触れていないのだが、すぐあとで見る第三部の議論を踏まえれば、この遡行は『危機』における現象学的還元に比されうるようなものであることがわかる。それは一方では、言葉によって構築された諸対象から成る客観的世界を離れて生活世界へと遡行していく運動と重なっており、他方では、言葉によって構成された諸対象が万人に与えられており、それゆえ人々が何の苦もなく互いに意思疎通することができるような「間主観的」な世界を離れて、主観性の「孤独」へと遡行していく運動と重なっている²。

¹ 言語が対象を構成するというこの主張は、言語が全くの無から対象を生み出すということを意味しない。われわれの常識的な直観が告げているように、表現という行為の出発点には常に表現されるべきものについての漠とした経験があるはずであろう。しかしながら、こうした表現されるべきものについての経験は表現され構成された対象についての経験がもっているような明晰性や持続性を欠いている。そのような経験は「意識のある空虚」あるいは「瞬間的な祈念」(*PbP*, 223/1.301) にすぎないのだ。

² もちろん、これはフッサールの忠実な解釈ではない。すでに見た通り、フッサールは生活世界への遡行と超越論的主観性への遡行を還元の二つの段階として明確に区別していた。しかしメルロ＝ポ

この点を明らかにするために、『知覚の現象学』第三部第一章「コギト」の議論に目を向けよう。メルロ＝ポンティはそこで第一部第六章で提示した見解を読者に思い起こさせながら、私が通常反省によって到達することのできる私の思考なるものは、実際には「語られたコギト (cogito parlé)」（*PbP*, 463/2.294）であると主張する。語られたコギトは「表現されたもの前で姿を消す」という言語の特性ゆえに言語以前の純粋な私の思考だと誤って思い込まれているのだが、実はそれは、すでに言語によって表現され構成された「觀念上の私」、すなわち、「正確には私の私でもなければ、かといってデカルトの私でもなく、反省するあらゆる人間の私である」ような理念的対象にすぎない（*PbP*, 462/2.292）。私は他ならぬ私自身について反省しているつもりで、実は特定の誰でもない私、つまり「ひと (on)」について考えているのである。

それゆえ、私が他ならぬこの私自身についての反省を真に成し遂げるためには、言い換えれば「自覚が完全になる」（*PbP*, 462/2.292）ためには、私の思考という言葉が最初に意味を獲得したときに経験されていたはずの、一切の言葉以前にある「私自身の生および私自身の思考」との私の「接触」を取り戻さなければならない。このような接触の経験を、メルロ＝ポンティは「無言のコギト (cogito tacite)」（*PbP*, 463/2.294）と名づける。メルロ＝ポンティによれば、無言のコギトとは、あらゆる対象についての私の経験の手前で、それ自体は決して意識されないままにとどまる「格変化不可能な (indéclinable) 主観性」、「自己の自己への現前」、「実存そのもの」である。言い換えれば、それは「あらゆる哲学に先立つ」究極の主観性である（*PbP*, 465/2.296）。

無言のコギトは、それが「格変化不可能」という『危機』の語彙で規定されていることから窺えるように、おそらくはフッサールの超越論的主観性を（少なくとも一つの）念頭に置いて考案された概念である。しかし、両者には重要な違いがある。それは無言のコギトが世界とそこにある存在者を「対象」として眼前に展開する「構成する主観」ではないという点である。メルロ＝ポンティによれば、無言のコギトとは、あらゆる「経験的知覚」が絶えず想定している「一つの全体的な世界投企ないし世界論理」（*PbP*, 466/2.298）、私の「世界への内属」（*PbP*, 466/2.298）という事実そのものである。これらの規定は、無言のコギトはそれ自体が世界との関わりであり、世界とは独立に存在する実体ではないということを示唆している。主観性の内奥に見出されるのは、純粋な私ではなく私 - 世界の関係なのだ。

しかし、ここで言う私 - 世界の関係は、フッサールの言う主観 - 対象の相関関係ではない。なぜなら、世界とは私にとって一つの対象ではなく、それ自体は決して対象化されることのない「地平」だからである。メルロ＝ポンティ自身は、地平よりも「領野 (champ)」という語を好んで用いる。「普遍性と世界は、個別性と主観の核心に見出される。このことは世界を一つの対 - 象 (ob-jet) にしてしまう限り決して了解できないだろう。[...] 世界

ンティは、根源的な生活世界をさらに超越論的主観性へと還元するという第二段階の還元を認めない。しかしメルロ＝ポンティは、第二段階の還元を完全に放棄するのではなく、還元が「哲学的孤独」をもたらすというフッサールの論点を保持しようとしている。その結果、メルロ＝ポンティにおいては「原初的沈黙」の領域への遡行という還元の定式は、生活世界への遡行と主観性の孤独への遡行という二重の意義をもつことになる。

とはわれわれの経験の領野であり、われわれとは世界の一つの眺め (vue) 以外の何ものでもない […]」(PbP, 467f./2.300 強調は原文)。仮にこの領野としての世界のさらに手前なり背後なり起源なりに、それを構成する主観性があると想定すれば、世界をそのような主観性にとっての対象という身分に再び引き戻すことになってしまう。それゆえ、領野としての世界という概念は「構成する主観など必要とせず、それを排除しさえする」(PbP, 468/2.300)。世界と私は、不可分ではあるが決して完全に融合してしまうことのない、領野の二つの構成契機である。メルロ＝ポンティにおいて還元が生活世界への遡行と主観性の孤独への遡行という二つの意義を獲得しうるのは、メルロ＝ポンティがこのように、超越論的主観性の代わりに無言の領野を「真に超越論的なもの」(PbP, 423/2.236) とみなしているからである³。

2. 3. 沈黙を破る所作

フッサールにとって、経験の起源である超越論的主観性への遡行を成し遂げるために必要なのは「判断中止」、つまり、われわれを世界と関わらせているさまざまな志向性の働きを停止することだった。この判断中止を遂行することで、われわれは自然的態度のまま世界と関わっているだけでは意識することのできない志向性の働きそのものを意識することができるようになる。このようなフッサールの方法論を導いている反省のモデルとは、「見ること (Sehen)」である。「直接的に「見ること」、単に感性的に経験しつつ見ることだけではなく、いかなる種類のものであれ根源的に与える意識としての見ること一般こそが、あらゆる理性的主張の究極の権利の源泉である」(Hua, III, 36/1.105)。単なる感性的な視覚から「根源的に与える意識」という意味にまで拡張されたこの「見ること」が、フッサールにとって現象学的探求の「原理」であるということは周知の通りである。

それに対して、メルロ＝ポンティの考えでは、究極の主観性としての「無言のコギト」は決して直接的に認識することはできない。無言のコギトは「自分自身と世界についてあやふやな手がかりしかもっていない」ような「純粋な自己感情」ないし「世界についての包括的で分節化されていない把握」にすぎず、それが漠然とであれ自分のことを意識することができるのは「死の不安や私に対する他人のまなざしの不安」といった極限状況においてでしかない (PbP, 465/2.297)。それゆえ、無言のコギトは行為によって、とりわけ言葉によって世界の中で実現されなければならない。言い換えれば、無言のコギトを認識するために「主体は自分がその秘密を握っていないような諸能力を展開することを、とりわけ自分が語る主体になることを要請されている。無言のコギトがコギトになるのは、それが自分自身を表現したときだけである」(PbP, 465f./2.297)。

無言のコギトを認識するためには、主体が「自分がその秘密を握っていないような諸能力を展開する」ことが必要であるというメルロ＝ポンティの主張は、根源的なものへと遡行しようとする主体の運動が、それとは正反対の運動によって必然的に引き裂かれるということを意味している。つまり、逆説的なことだが、根源的なものに到達するためには、

³ 超越論的主観性を「領野」に置き換えるというメルロ＝ポンティの計画については、川崎 (2018) を参照。

われわれは自分を根源的なものから遠ざけている諸作用——われわれがその働きを理解していないような諸作用——を停止するのではなく、むしろ積極的に働かせなければならないのである。言い換えれば、あらゆる既成の言語の手前にあるはずの「原初的沈黙」に立ち戻るためには、われわれはこの沈黙を破って再び語り始めなければならないのだ。

3. 超越論的言語

3. 1. 見ることと語ること

根源的なものへの遡行は、ある意味で根源的なものからの離反によってしか果たされえない——われわれの考えでは、この着想こそが、完全な還元の可能性というテーゼの最も深い意味であるとともに、メルロ＝ポンティの方法論をフッサールの方法論から決定的に分かつものである。

メルロ＝ポンティのこの着想は、現象学に対して次のような問いを提起する。言語による経験の記述というものは、経験の端的な把握にあとから付け加えられる二次的な作用にすぎないのだろうか。つまり、現象学者はまず経験を黙って見、そのあとで自分が見た光景について語るのだろうか。そのような見方は素朴ではないだろうか。むしろ、現象学者は経験をj見るためにこそまずは経験について語ることを必要としているのではないだろうか。経験をj見ることに對して、経験をj見えるようにすることが常に先行しており、この見えるようにすることこそが他ならぬ語ることなのではないだろうか。

『見えるものと見えないもの』の研究ノートの中で、メルロ＝ポンティは次のように綴っている。「(見たり感じたりしているという思考という意味で)「思考している」という觀念をもつためには、「還元」を行なうためには、内在や〈……についての意識〉に立ち返るためには、言葉 (les mots) をもつことが必要である。私が超越論的態度をとり、構成する意識を構成するのは (それを形成するのに役立つ関係とは別の関係に入り込むことも可能な、沈殿した意義の含蓄を伴った) 語の組み合わせによってである」(VI, 222f./240 強調は原文)。還元をあたかも言語抜きで遂行しているかのように振る舞うこと、その点に「表現されたもの前で姿を消す」という言語の特性に囚われたままになっている現象学者の素朴さがある。この素朴さを克服するためには、現象学者自身が使用する言語そのものについての徹底的な反省がなされなければならない。

3. 2. フィンクにおける超越論的言語

フィンクは『第六デカルト的省察』(以下『第六省察』)において、「超越論的言語」の問題の名のもとにこの課題に先鞭をつけている。現象学が学問である限り、現象学者は現象学的探求を自分の頭の中だけで終わらせるわけにはいかない。現象学者は、自分が超越論的態度に身を置くことによって獲得したさまざまな超越論的真理を言葉によって他人に伝えなければならない。ところが、この課題は現象学者に独特の問題を突きつける。それが「超越論的言語」の問題である。この問題は以下の三つの観点から定式化することができる

る (cf. Fink 1988: 93ff./84ff.)。

第一に、われわれが使用する言語も、言語を使用することで語りかける他者も、世界の中の存在者である。しかし、世界の中の存在者はすべて、超越論的態度においては判断中止によってその妥当を差し控えられてしまっている。だとすれば、超越論的態度において言語を使用して他者に語りかけることは不可能なのではないだろうか。そのような行為を遂行することによって、われわれは再び超越論的態度から自然的態度に転落してしまうのではないか。

第二に、言語というものはすべて、自然的態度の中で経験される事象を表現するために生み出された自然的言語であり、現象学者は超越論的真理を表現するために自然的言語以外の言語をもち合わせていない。それゆえ、現象学者は自然的言語をその通常の意味を変様させつつ用いることによって超越論的真理を表現するしかない。このようなことが一体どうやって可能なのか。

第三に、仮に現象学者が超越論的真理を自然的言語で表現することに成功したとしてもなお別の問題が待ち構えている。それは、現象学者が超越論的態度のもとで超越論的意味で用いた自然的言語を解釈するのは、現象学的還元をまだ遂行していない、自然的態度のうちにいる聞き手たちであるという問題である。フィンクの見解では、現象学者が超越論的意味で用いた言葉を十全に理解するためには、聞き手自身が現象学的還元を遂行して超越論的態度の中に身を置き、その言葉が自然的意味ではなく超越論的意味で用いられていることを了解しなければならない。しかし、現象学者はどうやって聞き手にそのような態度変更を遂行させることができるのだろうか。

3. 3. メルロ＝ポンティにおける超越論的言語

フィンクは後年の論考「フッサール現象学における操作的概念」の中で、この問題は現象学を「産出すること」か「認知すること」という二者択一の彼方に赴かせる重要な問題であるにもかかわらず、フッサール自身は決してこのような問題を提起しなかったと述べている (Fink 1976: 201f./41)。もっとも、『第六省察』の時点では、フィンク自身が、現象学者がまず経験を^{見た}あとで自分が見た光景について語るという構図を思わせるような論述を行なうことで、この二者択一を温存してしまっているように見える。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中で、「原初的沈黙」を破る「言語的所作」のことを、われわれが日常的に用いている「語られた言葉 (parole parlée)」に対置して「語る言葉 (parole parlante)」と呼んでいる。この概念は、「経験的な言葉」に対置して「超越論的な言葉 (parole transcendantale)」(PbP, 451/2.275) とも言い換えられていることから窺えるように、フィンクの問題の延長線上に位置するものであるが、すでに見た通り、メルロ＝ポンティにとって、現象学的認識は語る言葉の遂行の只中で構成されるものであって、語る言葉の遂行以前にそれ自体として成立しているものではない。したがって、超越論的な言葉の問題は、単に超越論的真理を表現し伝達する可能性だけではなく、超越論的真理を認識する可能性にも関わっている。表現と伝達と認識は、真理の「実現 (réalisation)」という出来事の不可分の構成契機なのである。

語る言葉とは、沈黙を表現するために特別に詭えられた言語ではなく、語られた言葉という「獲得物から出発して」のみ可能になるような、語られた言葉のある特異な使用のことである。しかし、語られた言葉の通常の使用においては、言語の意味はすでに構成された理念的対象として、万人に妥当するものとしてあらかじめ与えられており、それによって表現と伝達の可能性が保証されているのに対して、語る言葉においては、話者が語るべき事柄を表現する可能性も、それが他者に適切に伝達される可能性も何ら保証されていない。ここから、語る言葉を語ろうとする話者は、語りの特異性を確立することに失敗し、月並みな「ひと」の地位に転落する可能性に常に晒されることになる。

4. スタンダールの事例の検討

4. 1. 誠実さの問題

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中で、われわれはいかにして語る言葉を語ることができるのかという問いに答えていない。彼は「偉大な」あるいは「成功した」芸術や哲学を引き合いに出しながら、特異な表現は現に存在し、現に理解されているのだと述べるだけである。しかし、メルロ＝ポンティは一九五三年のコレージュ・ド・フランス講義「言語の文学的用法の研究」で、ヴァレリーとスタンダールという二人の作家の「自己形成」の過程を考察することで、この問いに改めて答えようとしている。本稿では最後に、彼のスタンダール論を例に、語る言葉を語るために必要とされる諸条件をごく簡単に検討したい。

メルロ＝ポンティがこの講義の中で探求している「誠実さ (sincérité)」の問題は、語る言葉をいかにして実現することができるかという問題として解釈することができる。現象学者は、自分が主観性の「孤独」の中で経験している事柄を他人に伝達するために、他人に理解される保証のない特異な言葉を語る。このとき、現象学者は自分の言葉が他人に理解されなくともよいと開き直るわけにはいかない。これは他者に対する誠実の問題である。しかし、現象学者は他人に理解されようとするあまり、月並みな言葉を用いて自分が伝達しようとしている真理を捻じ曲げてはならない。これは真理に対する誠実の問題である。最後に、他者と真理の両方に誠実に振る舞うことが、自分が置かれた立場や状況からどのようにして可能なのか、あるいは自分自身の信念や幸福と両立可能なのかということを考えなければならない。われわれはここで、他者、真理、自己の三つを両立させるという難問に直面する⁴。

4. 2. 間接的言語

この問題を、(1) 真理に忠実でありつつ真理を他者に伝達するという課題、(2) そのような両義的な振る舞いを自己の信念や幸福と両立させるという課題の二つに分割して検討

⁴ 哲学とは他者、真理、自己という両立しがたい三つの項を両立させる企てであるという見解は、「哲学をたたえて」の中で提示されている (EP, 36ff./222ff.)。

してみよう。メルロ＝ポンティは、第一の課題を解決するための方策を、スタンダールの表現技法のうちに見出している。スタンダールが文学において直面していた課題とは、世界や事物や他者から自分が受け取っている新鮮な感動——それに浸っている間はいかなる身動きもとれなくなってしまうような純粋な「夢想」——を言葉で表現し、他者に伝達するという課題であった。スタンダールの言う夢想を、メルロ＝ポンティは経験との間に一切の反省的な距離をもたない完全な没我状態、すなわち「直接的な感受性」(RULL, 174)として、『知覚の現象学』の「無言のコギト」の概念に引きつけて理解したうえで、それを表現するためにスタンダールが編み出した表現技法を「間接的言語 (langage indirect)」と名づける。

メルロ＝ポンティは、「間接的言語」の具体例の一つとして、『赤と黒』の中で、行きずりの男に身を任せてしまったというマチルドの後悔の台詞に反応してジュリアンが彼女を殺すために剣に飛びつく場面を挙げている (RULL, 210)。スタンダールはこの場面で、作中で多用する内的独白を突然黙らせ、ジュリアンの内面を行動という外面的出来事によって描写する。その結果、ジュリアンの行動は「どんな機転もこれほど巧みになしえないほどマチルドの心を打つ」(RULL, 210)。ここでスタンダールは、ジュリアンが剣に飛びつくという小さな「事実」を、余計な細部を描写することなく一息に語ることで、通常の作家であればどくどくしい説明によって損なってしまうであろうジュリアンの激情を、その強度を維持したまま読者に提示する。ここにおいて、表現の最も貴重な部分である行為者の内面は、語られた事柄ではなく沈黙として、対象ではなく地平として示される。スタンダールのこのような表現のうちに、メルロ＝ポンティは超越論的「領野」の経験を、「領野」としての「暗さ」を保ったまま他者に見えるようにする特別な言葉の可能性を見出していたと思われる。

4. 3. 来るべき読者

間接的言語は、表現すべきものをまさしく間接的にしか語らないがゆえに、「了解されず、読者に届かない危険」(RULL, 207)を冒すような言語である。他人に理解される絶対的な保証をもたないこのような言語を断固として行使するためには、人はある意味で他人に理解されることを断念しなければならない。メルロ＝ポンティはこの断念を、自分は百年後の読者に読まれるだろうというスタンダールの有名な予言のうちに見取っている。サルトルは『文学とは何か』の中で、スタンダールのこの予言を「芸術家の孤独」に対する「埋め合わせ神話」の一種とみなし、否定的に評価した (Sartre 1948: 132/124)。メルロ＝ポンティは「間接的言語と沈黙の声」の中で、サルトルのこの議論をおそらくは念頭に置きながら、同じ予言を「歴史の裁きへの呼びかけ」として、サルトルとは異なった仕方で解釈する (S, 119f./1.112f.)⁵。スタンダールは自分がこの世で読まれないことは受け入れるが、しかし読まれることは望む。しかも、神のような超越的存在でも、数千年先の人類のような不確かな存在でもなく、百年後の読者という彼が生き生きとその相貌を思い描くことのできる他者たち——「私が愛する人々、ロラン夫人、メラニー・ギルベール……のような

⁵ 「呼びかけ」をめぐるサルトルとメルロ＝ポンティの議論の相違は、赤阪 (2015) を参照。

人々」(Stendhal 1982: 536) ——に読まれることを望むのである。それゆえ、スタンダールの予言は世界からの^{デガジュマン}離脱の宣言ではない。それは真理を語ることを通して、自分が愛する人々を世界に到来させ、世界を愛すべきものに変えようとする、作家の独自の^{アンガジュマン}参加なのである。

これは犠牲的な態度だろうか。スタンダールは現世での幸福を諦めて死後の救済に賭けたのだろうか。メルロ＝ポンティの考えではそうではない。「スタンダールはフローベールのように文学を宗教にしたのではなく、情熱と幸福にした」(RULL, 200)。スタンダールにとって、「書くこと」は、それが他者による承認や死後の救済をもたらすから喜びなのではなく、それ自体が喜びなのだった。もちろん、スタンダールは最初からこのような境地に達していたわけではない。スタンダールが文学を名声獲得の手段にすることをやめて、文学そのものを幸福とするようになったのは、メルロ＝ポンティの考えでは年老いてからのことだった (RULL, 200)。しかし、逆説的にも、スタンダールの文学的成功をもたらした最も深い要因は「もはや自分を愛することではないようなことを受け入れる」(RULL, 175) このような態度変更であった。

このような議論が現象学と何の関係があるのか、と人は訝しむかもしれない。しかしわれわれは、フッサールが『危機』の中で述べたことを思い出すべきだろう。フッサールはそこで、現象学者は一つの「職業 (Beruf)」であると述べたのだった (Hua. VI, 138f./242f.)。この発言は、現象学が単なる哲学の一学説ではなく、一つの「生き方」であることを示唆している⁶。「事象そのもの」に専心すること、それは、スタンダールの文学実践に比せられるような危険で特殊な^{パロール}発話行為の習慣を身につけることであり、それは人生と向き合う態度そのものの変更を要求している。メルロ＝ポンティの言語論は、その意味するところを徹底的に展開していけば、このような結論に行き着くはずであるし、行き着かなければならないのだ。

文献表

メルロ＝ポンティおよびフッサールからの引用は以下の略号で表記し、スラッシュの前後に原書と邦訳の頁数をそれぞれ記した。文献が複数巻にわたる場合は頁数の前に巻数を付した。その他の文献からの引用は著者名、発表年、頁数で表記した。訳文はすべて拙訳だが、邦訳がある場合は適宜参照した。

メルロ＝ポンティの文献

EP: *Éloge de la philosophie et autres essais*, Gallimard, coll. « Folio essais », 1953. [「哲学をたたえて」, 滝浦静雄／木田元 (訳), 『眼と精神』所収, みすず書房, 1966年]

⁶ 吉川孝は、フッサール自身が1920年代に「倫理的転回」を経て現象学を「生き方」の問題として捉えるようになったと指摘している (吉川 2011)。本稿はメルロ＝ポンティの言語論の検討を通して吉川と同様の問題に到達したと言えるが、この問題をめぐるフッサールの見解とメルロ＝ポンティの見解の相違を検討する作業は別稿に譲りたい。

- PhP:** *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, coll. « Tel », 1976[1945]. [竹内芳郎／小木貞孝 (訳), 『知覚の現象学 1』, みすず書房, 1967年／竹内芳郎／木田元／宮本忠雄 (訳), 『知覚の現象学 2』, みすず書房, 1974年]
- RULL:** *Recherches sur l'usage littéraire du langage: Cours au Collège de France Notes, 1953*, Texte établi par Benedetta Zaccarello et Emmanuel de Saint Aubert. Metis Presses, 2013.
- S:** *Signes*, Gallimard, coll. « Folio essais », 2001[1960]. [竹内芳郎 (監訳), 『シーニュ 1』, みすず書房, 1969年／竹内芳郎 (監訳), 『シーニュ 2』, みすず書房, 1970年]
- VI:** *Le visible et l'invisible*, Gallimard, coll. « Tel », 1979[1964]. [滝浦静雄／木田元 (訳), 『見えるものと見えないもの』, みすず書房, 1989年]

フッサールの文献

- Hua. III:** *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, K. Schuhmann (hrsg.), Haag: Martinus Nijhoff. [エトムント・フッサール, 渡邊二郎 (訳), 『イデーニ I 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1巻 純粹現象学への全般的序論』(全2巻), みすず書房, 1979-1984年]
- Hua. VI:** *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, W. Biemel (hrsg.), Haag: Martinus Nijhoff, 1976. [E. フッサール, 細谷恒夫／木田元 (訳), 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学, 中公文庫, 1995年]

その他の文献

- Bruzina, R. (2002), "Eugen Fink and Maurice-Merleau-Ponty: The Philosophical Lineage in Phenomenology", in T. Toadvine and L. Embree (eds.), *Merleau-Ponty's Reading of Husserl*, Kluwer, pp. 173-200.
- Fink, E. (1966), *Studien zur Phänomenologie 1930-1939*, Martinus Nijhoff.
- (1976), *Nähe und Distanz*, Alber.
- (1988), *VI. Cartesianische Meditation, Teil 1. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre. Text aus dem Nachlass Eugen Finks (1932) mit Anmerkungen und Beilagen aus dem Nachlass Edmund Husserls (1933/34)*, Hrsg. v. Hans Ebeling, Jann Holl und Guy van Kerckhoven, Kluwer. [エトムント・フッサール／オイゲン・フィンク, 新田義弘／千田義光 (訳), 『超越論的方法論の理念 第六デカルト的省察』, 岩波書店, 1995年]
- Noble, S. A. (2014), *Silence et langage : Genèse de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill.
- Sartre, J-P. (1948), *Qu'est-ce que la littérature?*, Gallimard, coll. « Folio », 2008. [加藤周一／白井健三郎／海老坂武 (訳), 『文学とは何か [改訳新装版]』, 人文書院, 1998年]
- Smyth, B. A. (2014), *Merleau-Ponty's Existential Phenomenology and the Realization of Philosophy*, Bloomsbury Academic.
- Stendhal. (1981), *Œuvres intimes*, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade ».
- . (1982), *Œuvres intimes*, t. II, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade ».
- 赤阪辰太郎 (2015), 「サルトルを読むメルロ＝ポンティ —— 『文学とは何か』をめぐる」, 『メルロ＝ポンティ研究』, 第19号, 45-57頁.

- 川崎唯史 (2018), 「知覚の本性から主体の本性へ: 前期メルロ＝ポンティのプログラム」, 『メタフィシカ』, 第 49 号, 85-98 頁.
- 佐野泰之 (2018a), 『『言語の文学的用法の研究』——書くことと生きること』, 松葉祥一／本郷均／廣瀬浩司 (編), 『メルロ＝ポンティ読本』, 法政大学出版局, 2018 年, 256-266 頁.
- (2018b), 「身体の黒魔術、言語の白魔術 ——メルロ＝ポンティ「言語の文学的用法の研究」講義におけるヴァレリー読解をめぐって」, 『立命館大学人文科学研究紀要』, 第 114 号, 1-32 頁.
- 八幡恵一 (2012), 「メルロ＝ポンティとフィンク ——「現象学の現象学」をめぐって」, 『年報地域文化研究』, 第 16 巻, 218-239 頁.
- 吉川孝 (2011), 『フッサールの倫理学 ——生き方の探究』, 知泉書館.